

貴婦人

—

番茶を焙じるらしい、いゝ香氣が、眞夜中とも思ふ頃芬としたので、うと／＼としたやうだつた澤は、はつきりと目が覺めた。

随分遙々の旅だつたけれども、時計と云ふものを持たないので、何時頃か、其は分らぬ。尤も村里を遠く離れた峠の宿で、鐘の聲など聞えやうが無い。こつ／＼と石を載せた、板葺屋根も、松高き裏の峰も、今は、溪河の流れの音も寂として、何も聞えず、時々颯と音を立て、枕に響くのは山風である。

蕭殺たる此の秋の風は、宵は一際鋭かつた。藍縞の袴を着て、黒の兵子帯を締めて、羽織も無い、澤の少いが瘦せた身體を、背後から絞つて、長くも無い額髪を冷く拂つた。其の餘波が、カラ／＼と乾びた木の葉を捲きながら、旅籠屋の框へ吹込んで、大な爐に、一簇の黒雲の濃く舞下つたやうに漾

ふ、松を焼く煙を弗と吹くと、煙は筵の上を階子段の下へ潜んで、向うに眞暗な納戸へ逃げて、而して爐べりに居る二人ばかりの人の顔が、はじめに眞赤に現れると一所に、自存に掛つた大鍋の底へ、ひら／＼と炎が擲んで、眞白な湯氣のむく／＼と立つのが見えた。

其の湯氣の頼母しいほど、山氣は寒く薄い膚を透したのであつた。午下りに麓から攀上つた時は、其の癬汗ばんだくらゐだに

表二階の、狭い三疊ばかりの座敷に通されたが、案内したものの顔も、漸つと仄くばかり、目口も見えず、最う暗い。

色の黒い小女が、やがて漆の禿げたやうな装で、金盞に柄を附けたらうと思ふ、大な十能に、焚落しを、ぐわん、と装つたのと、片手に煤けた行燈に點灯したのを提げて、みし／＼と段階子を上つて来るのが、底の知らない天井の下を、穴倉から迫上つて来るやうで、ばつばつと呼吸を吹く状に、十能の火

が眞赤な脈を打つた……冷な風が舞込むので。

座敷へ入つて、惜気なく眞鍮の火鉢へ打撒けると、横に肱掛窓めいた低い障子が二枚、其の紙の破から一文字に吹いた風に、又ニとしたのが鮮麗な朱鷺色を染めた、あゝ、秋が深いと、火の氣勢も霜に染む。

行燈の灯は薄もみぢ。

小女は尚ほ黒い。

澤は其のまゝにじり寄つて、手を翳して俯向いた。一人旅の姿は悄然とする。

がさ／＼、がさ／＼と、近いが行燈の灯は届かぬ座敷の入口、板廊下の隅に、芭蕉の葉を引摺るやうな音がすると、蝙蝠が覗く風情に、人の肩がのそりと出て、

「如何様で、」

とぼやりとした聲。

「え？」と澤は振向いて、些と怯えたらしく聞返す、

「按摩でな。」

と大分横柄・・・中に居るものゝ髯のありなしは、よく其の勘で分ると見える。ものを云ふ顔が、反返るほど仰向いて、澤の目には咽喉ばかり。

「お療治は如何様で。」

「まあ、可ござんした。」

と旅なれぬ少ものは慇懃に云つた。

「はい、お休み。」

と其でも頭を下げたのを見ると、抜群なる大坊主で、行燈に伸掛るかと、ぬつくりと起つたが、障子を閉める、と沙汰が無い。

前途に金色の日の輝く思ひの、都をさしての旅ながら、恁る山家は初旅で、旅籠屋へあらはれる按摩の事は、古い物語で讀んだばかりの澤は、つく／＼ともものゝ哀を感じた。

澤は薄汚れた、唯それ一個の荷物の、小さな提革
鞆を熟と視ながら、蒼い形で、さし俯向いたのであ
る。

爾時、さつと云ひ、さつと鳴り、さら／＼と響い
て、小窓の外を宙を通る・・・冷い裳の、すら
／＼と木の葉に觸つて・・・高嶺をかけて星の
空へ軽く飛ぶやうな音を聞いた。
吹頻つた秋の風が、夜は姿をあらはして、人に言
葉を掛けるらしい。

宵には其の聲さへ、寂しい中にも可懐しかった。

さて、今聞くと同じ聲。

けれども、深更に聞く秋の聲は、夜中にひそ／＼
と門を行く聲音と殆ど齊しい。宵の人通りは、内に
居るものに取つて誰かは知らず知己である。が、更
けての聲音は、敵かと思ふ隔てがある。分けて戀の
ない――人を待つ思の絶えた――一人旅の
奥山家、枕に音づるゝ風は我を襲はむとする殺氣を

含む。

處で……澤が比處に寝て居る座敷は――
其の家も――宵に宿つた旅籠屋ではない。

230

あの、小女が来て、それから按摩の顯れたのは、
藏屋と言ふので……今宿つて居る……
此方は、鍵屋と云ふ……此の峠に向合つた二
軒旅籠の、峰を背後にして、崖の樹立の蔭に埋まつ
た寂しい家で。前のは背戸がずつと展けて、向うの
谷で劃られるが、其の間、僅少ばかりでも畠があつ
た。

峠には此の二軒の他に、別な納戸も既も無い、こ
れは昔から然うだと云ふ。

「峠、お泊りでごいせうな。」
麓へ十四五町隔つた、崖の上にある、古い、薄暗
い茶店に憩つた時、裏に鬱金木綿を着けた縞の胸服
を、肩衣のやうに着た、白髪の爺の、霜げた耳に輪
數珠を掛けたのが、店前に畏つて居て聞いたので。

其處の敷ものには熊の皮を擴げて、目の處を二つゑ
ぐり取つたまゝの、而して木の根のくり抜の大火鉢
が置いてあつた。

背戸口は、早や充滿た山霧で、岫の雲を吐く如く、
幹の半ばを其の霧で蔽はれた、三抱四抱の栃の樹が、
すく／＼と竝んで居た。

名にし負ふ栃木峠よ！麓から一日が／＼り、上る
に従ひ、はじめは谷に其の梢、やがては崖に枝組違
へ、次第に峠に近づくほど、左右から空を包むで、
一時路は眞暗な夜と成つた。……梢の風は、
雨の如く下闇の草の徑を、清水が音を立て、蜘蛛手
に走る。

前途を遙に、ちら／＼と燃え行く炎が、煙ならず
白い沫を飛ばしたのは、駕籠屋が打振る晝中の松明
であつた。

漸と茶店に辿着くと、其の駕籠は軒下に建つて居
たが、澤の腰を掛けた時、白い毛布に包まつた病人

らしい漢を乗せたが、ゆらりと上つて、すた／＼行く

峠越の此の山路や、以前も舊道で、餘り道中の無かつた處を、汽車が通じてからは、殆ど廢驛に成つて、猪も狼も又戻つたと言はれる。其の年、烈しい暴風雨があつて、鐵道が不通に成り、新道とても藥研に刻んで崩れたゝめ、旅客は皆こゝを辿つたのであるが、其も當時だけで、又中絶えして、今は最う、後れた雁ばかりが雲を越す思ひで急ぐ。

上端に客を迎顔の爺様の、トやつた風采は、建場らしくなく、墓所の茶店の趣があつた。

「旅籠はの、大昔から、藏屋と鍵屋と二軒ばかりでござんすがの。」

「何方へ泊らうね。」

「やあ、」

と皺手を膝へ組んで、俯向いて口をむぐ／＼さして、

「鍵屋へは一人も泊るものがごいせぬ。何や知らん怪しい事がある言うての。」

澤は藏屋へ泊つた。

が、焼麩と小菜の汁で膳が濟むと、最う行燈を片寄せて、小女が、堅い、冷い寢床を取つて了つたので、此からの長夜を、いとゞ佗しい。

座敷は其方此方、人聲して、臺所には賑かなものゝ音、爐邊には寂びた笑も時々聞える。

寂しい一室に、ひとり革靴と睨めくらをした澤は、頻に音訪ふ、颯と云ふ秋風の漫ろ可懐さに、窓を開ける、と冷な峰が額を壓した。向う側の其の深い樹立の中に、小さく穴の蓋を外づしたやうに、あか／＼と灯影の映すのは、聞及んだ鍵屋であらう、二軒の他は無峠。

一郭、中が窪んで、石碓を擴げた・・・右左は一面の霧。さしむかひに、其でも戸の開いた前あたり、何處ともなしに其の色が薄かつた。

で、つと小窓を開くと、其處に袖摺れた秋風は、
ふと向うへ遁げて、鍵屋の屋根をさら／＼と渡る。
颯、颯と鳴る。而して、白い霧はそよとも動
かないで、墨色をした峰が揺ぶれた。

夜の樹立の森々としたのは、山嵐に、皆散
果てた柳の枝の撓ふやうに見えて、鍵屋の軒を吹く
のである。

透かすと 鍵屋の其の寂しい軒下に、赤いも
のが竝んで見えた。見る内に、霧が薄らいで、其が
霰に成るのか、赤いものは艶を帯びて、濡色に立つ
たのは、紅玉の如き柿の實を賣るさうな。

「一つ食べよう。」
「 次手に、宿の前だけでも歩行い
て見よう、」

「遠くへ行かつせるな、天狗様が居ますぜえ。」
あり合はせた草履を穿いて出る時、亭主が聲を掛
けて笑つた。其の爐邊には、先刻の按摩の大道が、
やがて自在の中途を頭で、神妙らしく正整と坐つて。

胡坐搔いて駕籠舁も二人居た。

澤は此方の側傳ひ、鍵屋の店を謎を見る心持で差覗きながら、一度素通りに、霧の中を、翌日行く方へ歩行いて見た。

少し行くと橋があつた。

驚いたのは、其の土橋が、危つかしく壊れ壊れに成つて居た事では無い。

渡掛けた橋の下は、深さ千仞の溪河で、疊まり疊まり、犇々と蔽異なつた濃い霧を、深く貫いて、峰裏の樹立を射る月の光が、眞蒼に、一條霧に映つて、底から逆に銀鱗の龍の、一畝り畝つて閃めき上るが如く見えた其の凄さであつた。

流の音は、ぐわうと云ふ。

澤は目のあたり、深山の秘密を感じて、其處から後へ引返した。

歸りは、幹を竝べた栃の木、星を指す偉大なる圓柱に似たのを廻り廻つて、山際に添つて、反對の側を鍵屋の前に戻つたのである。

「此の柿を一つ」

「まあ、お掛けなさいましな。」

框を納涼臺のやうにして、端近に、小造りで二三の婦が、しつとりと夜露に重さうな縞縮緬の襦を投げつゝ、軒下を這ふ霧を軽く踏んで、すらりと、くの字に腰を掛け、戸外を視めて居たのを、澤は一目見て慄然とした。月の明い美人であつた。

が、櫛卷の髪に柔かな艶を見せて、背に、ごつ／＼した矢張り鬱金の裏のついた、古い胴服を着て、身に染む夜寒を凌いで居たが、其の美人の身に着いたれば、寶藏千年の鎧を取つて投懸けた風情がある。

聲も亂れて、

「お代は？」

「私は内ものではないの。でも可うござんす、めしあがれ。」

と爽な、清しいものいひ。

四

澤は、駕籠に乗つて藏屋に宿つた病人らしい其と言ひ、鍵屋に此の思ひがけない都人を見て、つい聞知らずに居た、此の山には温泉などあつて、それで逗留をして居るのであらう。

と先づ思つた。

處が、聞いて見ると、然うで無い。唯此處の浮世離れがして寂しいのが氣に入つたので、何處にも行かないで居るのだと云ふ。

寂しいにも、第一此の家には、旅人の來て宿るものは一人も無い、と茶店で聞いた。――泊がさて無いばかりか、**ニ**して見ても、がらんとした古家の中に、其の婦ばかり。一寸鼠も騒がねば、家族らしいものゝ影も見えぬ。

男たちは、疾から人里へ稼ぎに下りて少時歸らぬ。内には女房と小娘が残つて居るが、皆向うの賑かな藏屋の方へ手傳ひに行く。……商賣敵も何も

「まあ、泊つて御覽なさいませんか。」

はじめは串戯らしかったが、後は眞個誘つた。

「是非、然うなさいまし、お化が出る云つて

而して婦が一人で居るのを見て、お泊んなさら

ないでは卑怯だわ。人身御供に出會せば、屹と男が

助けると極つたものなの。又、助けられる事に

成つて居るんですもの。ね、然うなさい。」

で、退引きあらせず。

「藏屋の方は構ひません。一寸、私が行つて斷つ

て来て上げます。」

と氣輕に、すつと出る、留南奇の薰が颯と散つた、

霧に月射す裳の影は、繪で見ると見るやうな友染である。

澤は箆に並んだ其の柿を鵜呑にしたやうに、ボン

と成つた。——實は旅店の注意で、暴風雨で

變果てた此の前の山路を、朝がけの旅は、不案内の

ものに危険であるから、一同のするやうに、路案内

を雇へ、と云つた。成程、途中の覺束なさは、

今見た橋の霧の中に穴の深いのでよく知れ

る……寝るまでに必ず雇はう、と思つて居た、

其の事を言ひ出す隙も無かつたのである。

「お荷物は此だけですつてね、然う？」

と革靴を袖で抱いて歸つて來たのが、打傾いて優しく聞く。

「恐縮です、恐縮です。」

澤は恐入らずには居られなかつた。鳶の羽には託けても、此の人の兩袖に、――慥く、なよ／＼と、抱取らるべき革靴ではなかつたから。

「宿で、道案内の事を心配して居ましたよ。其は可いの、貴下、頼まないでお置きなさいまし。途中の分らない處は僅少の間ですから、私がお見立て申すわ。逗留してよく知つて居ます。」

と人替りに、軒に立つて、中に居る澤に慥う言いながら、其の安からぬ顔を見て莞爾した。

「大丈夫よ。何が出たつて、私が無事で居るんですもの。さあ、お入んなさいまし。あゝ、寒いわね。」

と肩を細り

廂はづれに空を仰いで、山の瑞

の月つきと顔かんはせを合あはせた。

「最もう霜しもが下おりるのよ、
爐ろの處ところで焚たき火びをしませう
ね。」

美女は爐を圍んで、少く語つて多く聞いた。而して、澤が其の故郷の話をするのを、もの珍らしく喜んだのである。

澤は、隔てなく身の上さへ話したが、しかし、十有餘年崇拜する、都の文學者某君の許へ、宿望の入門が叶つて、其のために急いで上京する次第は、何故か、天機を洩らすと云ふやうにも思はれるし、又餘り縁遠い、そんな事は分るまいと思つて言はなかつた。

藏屋の門の戸が閉つて、山が月ばかり、眞蒼に成つた時、此の鍵屋の母娘が歸つた。例の小女は其の娘で。

二人が歸つてから、寢床は二階の十疊の廣間へ、母親が設けてくれて、其處へ寝た。――丁ど眞夜中過ぎである。枕を削る山嵐は、激しく板戸を挫ぐばかり、髪を蓬に、藍色の面が、斧を取つて襲ふかとももの凄い。……心細さは鼠も鳴か

ぬ。

其處へ、茶を焙じる、夜が明けたやうな薫で、澤は蘇生つた氣がしたのである。

けれども、寝られぬ苦しさは、ものゝ可恐しさに増して堪へられない。餘りの人の戀しさに、起きて、身繕ひして、行燈を提げて、便のないほど堂々廣い廊下を傳つた。

持つて下りた行燈は階子段の下に差置いた。下の縁の、づゝと奥の一室から、ほのかに灯の影がさしたのである。

邪な心があつて、ために憚られたのではないが、一足づゝ、みし／＼ぎち／＼と響く・・・嵐吹添ふ縁の音は、恚る山家に、おのれ魅と成つて、齒を剥いて、人を威すが如く思はれたので、忍んで密と拔足で渡つた。

傍へ寄るまでもなく、大なる障子の破目から、立ちながら裡の光景は、衣桁に掛けた羽衣の手に取

るばかりによく見える。

ト荒果てたが、書院づくりの、床の傍に、あり／＼と彩色の残った繪の袋戸の入った棚の上に、呀！壁を突通して紺青の浪あつて月の輝く如き、表紙の揃つた、背皮に黄金の文字を刷した洋綴の書籍が、ぎしりと竝んで、燦として蒼き光を放つ。

美人は其の横に、机を控へて、行燈を傍に、背を細く、裳をすらりと、なよやかに薄い絹の搔卷を肩から羽織つて、兩袖を下へ忘れた、雙の手を包んだ友染で、清らかな頸から頬杖支いて、繰擴げたペイジを凝と讀入つたのが、態度で經文を誦するとは思へぬけれども、神々しく、媚めかしく、然も婀娜めいて見えたのである。

「お客様ですか。」

澤が、聲を掛けようとして、思はず行詰つた時、向うから先んじて振向いた。

「私です。」

「お入んなさいましな、待つて居たの。屹と寝られなくつて在らつしやるだらうと思つて、」

障子の破れに、顔が艶麗に口の綻びた時に、さすがに凄かった。が、寂しいとも、夜半にとともに、何とも言譯などするには及ばぬ。

「御勉強でございますか。」

我ながら相應はない事を云つて、火桶の此方へ坐つた時、違棚の背反の文字が、稻妻の如く澤の瞳を射た、他には何も無い、机の上なるも其の中の一冊である。

澤は思はず、跪いて兩手を支いた。やがて門生たらむとする師なる君の著述を續刊する、皆名作の集なのであつた。

時に、見返つた美女の風采は、蓮葉に見えて且つ氣高く、

「何うなすつたの。」

澤は仔細を語つたのである
聞きつゝ、世にも嬉しげに見えて、

「頼母しいのねえ、貴下は えゝ、知つて居ますとも、多日御一所に居たんですもの。」

「では、あの、奥様。」

と、片手を支きつゝ、夢を見るやうな顔して云ふ。
「まあ、嬉しい！」
と派手な聲の、あとが消えて、じり／＼と身を緊めた、と思ふと、ほろりとした。

「奥様と云つて下すつたお禮に、いゝものを御馳走しませう　めしあがれ。」

と云ふ。最う晴やかに成つて、差寄せる盆に折敷いた白紙の上に乗つたのは、たとへば親指の尖ばかり、名も知れぬ鳥の卵かと思ふもの

「栃の實の餅よ。」

同じものを、来る途の爺が茶店でも賣つて居た。

が、其の形は宛然違ゝふ。

「貴下、氣味が悪いんでせう」

と顔を見て又微笑みつゝ、

「眞個の事を言ひませうか、私は人間ではない

の。

「えゝ！」

「鸚鵡なの、」

「」

「眞白な鸚鵡の鳥なの。此の御本の先生を、最う其は……鼻屑な夫人があつて、其の方が私を飼つて、口移しに餌を飼つたんです。私は接吻をする鳥でせう。而してね、先生の許へ贈りものになつて、私は行つたんです。」

先生は私に口移しが出来ないの……然うすると、其の夫人を戀するやうに成るからつて。

私は中に立つて、其の夫人と、先生とに接吻をさせるために生れました。而して、遙々東印度から渡つて来たのに、口惜いわね。

其で居て、傍に置いては、つい口をつけないでは居られないやうな氣に成るからつて、私を放したんです。

雀や燕でないのだもの、鸚鵡が町家の屋根にでも居て御覽なさい、其こそ世間騒がせだから、こゝへ来て引籠つて、先生の小説ばかり讀んで居ます。

貴下、嘘だと思ふんなら、其の證據を見せませ

う。

と不思議な美しい其の餅を、卜脣に受けたと思ふ
と、澤の手は取られたのである。
で、ぐいと引寄せられた。

「恚うして、さ。」

と、櫛卷の其の水々とあるのを、がつくりと額の
消ゆるばかり、仰いで黒目勝な涼い瞳で凝と、凝視
めた。白い頬が、滑々と寄つた時、嘴が觸れたので
あらう、澤は見る／＼鼻のあたりから、あの
女の乳房を開く、鍵のやうな、鸚鵡の嘴に變つて行
く美女の顔を見ながら、甘さ、得も言はれぬ其の餅
を含んだ、心消々と成る。山嵐に弗と灯が消えた。

と婦の全身、廂を漏る月影に、たら／＼と人の姿
の溶ける風情に、輝く雪のやうな翼に成るのを見
つゝ、澤は自分の胸の血潮が、同じ其の月の光に、
眞紅に透通るのを覺えたのである。

「それでは、よく先生にお習ひなさいよ。」
東雲の氣爽に、送つて来て別れる時、つと高く通
しるべの松明を擧げて、前途を示して云つた。

其の火は朝露に晷々と、霧を拂つて、満山の木の
葉に映つた、松明は龍田姫が、恚くて錦を染むる、
燃ゆるが如き繪の具であらう。

白い鸚鵡を、今も信ずる。

【完】